

# ふくいミュージアム

1988. 9 .30

No.14

福井県立博物館



新三島山印番三十八五二町員南市成石影知之有行従務副中作爲行機中四社社公明伊四十九九千二二五四

錦絵「鯖江歩兵第三十六連隊觀兵式之図」

武生市 加賀次男氏藏

## 福井県立博物館第9回特別展 武将のいでたち

—福井ゆかりの甲冑と武具—  
10月19日(水)～11月27日(日)

近世に入って関ヶ原合戦、大坂の陣と全国的な規模での戦いを最後に、徳川幕府の支配体制が確立してからは、大きな戦いはほとんどありません。

鎧(よろい)や兜を中心とした武具類は、あくまで戦争のための道具であり、太平の世には不要のもので、それでも万一への備えと、武将の表道具としての意識から、江戸時代に入ってからでも多数の甲冑がつくられています。

福井においても越前、若狭の各大名家では多くの甲冑を所持していた筈ですが、現在残存しているもので、伝来のはっきりしているのは数少なく、また福井で活躍していた甲冑師たちの作も少数しか見ることができません。

今度の特別展ではこれら大名家伝来の甲冑と、福井ゆかりの甲冑師たちの製作したものを中心に展示し、武将たちの晴れ姿を偲んでいただくと共に、当時の金工、染織、革工など工芸技術の粋を集めた総合的な美術工芸品としての甲冑に対して理解を深めて欲しいと思います。



紺糸威五枚胴具足

酒井忠勝着用  
(小浜市白鬚区蔵)



六十二間星兜 越前豊原住人貞生作

展示内容は次のとおりです。

### A 大名家の伝来

福井(松平家) 武生(本多家) 小浜(酒井家)  
丸岡(有馬家) 大野(金森家、土井家)  
鯖江(間部家) 勝山(小笠原家)

松平家伝来の明珍吉久作の魚鱗具足をはじめ、光通、昌親、吉邦など歴代藩主の着用したものや酒井家の忠勝、忠義のものなど、大名家にふさわしい豪華なつくりの甲冑があります。いずれも江戸時代の

当世具足（とうせいぐそく）と呼ばれる形式の揃い物が中心ですが、比較的新しいだけに傷みも少なく当初の状態に近いものがあります。また鞍や笠（あぶみ）などの馬具や大名家伝来の刀装もあわせて展示します。

B 福井ゆかりの甲冑師

越前には戦国時代の頃から丸岡の豊原（現在の丸岡町の東）で馬面派の甲冑師が活躍し、馬面貞生や朝則、朝次、正行などが兜をつくっていました。馬面派の作は全国的にみても数が少なく、独特の作風を持つ貴重な存在となっています。このコーナーでは馬面派の星兜、筋兜や、越前岩井派、長曾祢派などのものを展示します。

C 武将のいでたち（一式）

武将たちが戦いに臨む際に着用する甲冑、刀、馬具など一式を揃えて展示します。

D 戦いの様相(絵画・文書)

近世の戦いはどういう形で行われたかを「大坂夏の陣図屏風」を中心とした絵画、文書などで示します。



E 刀剣

三猿図透鐔 越前住記内作

越前新刀を代表する刀工康継を中心とした刀工の作を展示します。

F 鐔（つば）

鐔は刀装具の一つですが、江戸時代には刀を差すのが武士の正装となり、鐔にも飾りとしての要素が加わって、デザインの面白いものや、精巧な金工技術を駆使した作品がつくられるようになってきました。福井の鐔師として活躍した記内派や、越前明珍派、春田派などが作った鐔を展示します。

冬の企画展

白山周辺のそり

5 6 豪雪の大晦日、スノーボードで餅を配っている餅屋さんがいました。雪が深すぎて車が使えなくなっていたからです。今ではそりは豪雪の時の非常手段か、子供の遊び、あるいは生活から全く離れた競技としてしか生きていないのでしょうか。ところが大野市や勝山市では今もそりが木材の搬出に使われています。そりが使えるので、小規模な木材の搬出は冬の方が便利なのです。またそりを使えば重い荷物も容易に運ぶことができます。『北越雪譜』ではそりを「雪車」と書いています。鱧、轆もそり。文字どおりそりは雪の上の車や船であったというわけです。

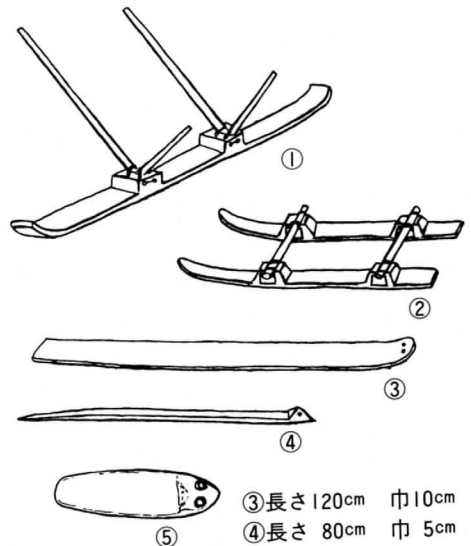
自動車などが普及する以前は、雪国ではいろいろなそりが広く使われていました。そこには雪に耐えるだけでなく、不利な条件を逆に利用した人々の積極的な姿を見ることができます。展覧会では福井と近県に伝えられた各種のそりをご紹介します、雪をいかに利用するか考えたいと思います。

ところで皆さんはどんな形のそりをご存じでしょうか。最近でもよく見られるのは①のシンボゾリで山から木をおろす時に使われます。②はそりの中でもっともよく見られる形で山から木を出したり、平

地で物を運ぶ時に使われました。

そりはこういう形の物だけではありません。ずいぶん不思議な形の物もあります。③、④、⑤もそりですがどんなふうにするかわかりますか？答は展覧会で見て下さい。

期 間 2月7日(火)～3月19日(日)



- ③長さ 120cm 巾10cm
- ④長さ 80cm 巾 5cm
- ⑤長さ 50cm 巾20cm くらい大きさです。

## 研究ノート

## 若者組と夜学生

## 一本県近代青年集団史の試み(1)

## はじめに

近世から村の伝統的な若者集団として活動をつづけてきた若者組が、近代にはいって青年会や青年団にその姿を変えようとする。その過程には、一方で国家による民衆(青年)教化政策の展開、他方で青年層を含む地域民衆自身の国家的関心の高まりという二つの側面があったことを見逃すことはできない。

若者組の青年会・青年団への改組の過程をより具体的にみていくと、①明治初期の「学制」施行による夜学校の開設、②明治10年代の自由民権運動による政治的関心・学習意欲の高まり、③明治20年代の「徴兵令」の改正と補習教育の要請、④日清戦争後の民衆ナショナリズムの高揚、⑤日露戦争後の地方改良運動における官製青年団運動などが契機となって、しだいに青年会・青年団としての組織整備がなされていったと考えられる。そこで、小稿では、まず①の「学制」施行による夜学校の開設に焦点をあて、県下の事例にもとづきながら、若者組との関連をみてみよう。

## I

最初に、若者組について簡単にふれておきたい。

本来、若者組とは、子供組、壮年組、老年組などとともに、近世以来の村の年齢集団の一つであり、加入や脱退の時期に地域差はあるが、たいてい15歳から25歳(あるいは結婚)までの村の若者たちが構成されていた。その活動や機能は、これも村の生業形態や立地条件によって一律に論じることができないが、主に村の祭の執行や余興の主催、村の警防や秩序維持、共同作業の実施、仲間の集団的訓練や学習活動、および婚姻の統制などであったとまとめることができよう<sup>(1)</sup>。

なお、本県ではすでに若者組の民俗調査がなされており、「若イモン」「若衆仲間」「若衆組」など地域によってその呼称は多種多様であるが、越前・若狭両地方とも「若連中(わかれんちゅう)」と呼

ぶことが最も一般的であったと報告されている<sup>(2)</sup>。

## II

明治5年8月に、「学制」が制定される。これは、学区制にもとづいて全国の学校を小学校・中学校・高等学校の三段階に編成し、全国民を対象とする近代的学校制度の確立をめざすものであった。とくに、小学校はすべての国民が就学すべきものとされ、土地や民情に応じて、尋常小学・女児小学・村落小学・貧人小学・小学私塾・幼稚小学の六種と、さらに廃人学校に分けられた。そのうち、村落小学は、「僻遠ノ村落農民ノミアリテ教化素ヨリ開ケサルノ地ニ於テ其教則ヲ少シク省略シテ教ルモノナリ、或ハ年已ニ成長スルモノモ其生業ノ暇来リテ学ハシム、是等ハ多ク夜学校アルヘシ」

とされ、夜学校を開設することが奨められた。そして、ここでいう「年已ニ成長スルモノ」にこそ、若者組を構成している村の若者たちがあてはまるのであった。

そのことを、県内に残された当時の夜学校に関する史料でみてみよう。三方郡美浜町新庄には、近世(天保期)から近代(昭和戦前期)にいたるまでの若者組そして青年会に関する一連の文書が残されている。そのうちの一つに、「明治七年開校八年改正、新庄小学」と記された「夜学生規則書」がある。前書き部分に、

「昨明治七歳八月、頑僻ノ旧弊ヲ一洗シ、変改シテ以テ若者中間ヲ廃止、為文明ノ夜学生ト称シ、国富開化ヲ求得センカタメニ旧習ノ党與ヲ反則シテ、小学<sup>江</sup>夜間ニ昇校シテ、教科ヲ授業スルヲ以テ夜学生ト謂フ」

とあり、毎月旧15日の晩に夜学校を開くとしている。さらに、校則として

- 「第一条 暮昏手前第三時出席之事、  
 第二条 連名到着帳ヲ廻シ苗字清名等記載スベシ  
 第三条 拾五人テ一例トシテ順序相定ムル事、  
 第四条 取締之者ヨリ種々ノ披露ヲスベキ事、  
 第五条 連席之内ヨリ老人宛問答ニ及ブベキ事、  
 第六条 答ヤニヨリテ議長<sup>江</sup>申度事アラハ手ヲ挙  
 グベシ、  
 第七条 手ヲ挙クルヲ見テ答ヲ問フベキ事、  
 第八条 議長<sup>江</sup>は老人宛ヨリ外ハ問答ヲ不評、

- 第九條 教師訓読之物ヲ講読スル時ハ序問スベシ、  
 第十條 孝々論読書スルモ法トスベキ事、  
 第十一條 孝々論輪講ノスベキ事、  
 第十二條 戸外ニ乱妨致争論狂人ヲタ、シ、酒論  
 又ハ夜行ニ法外ナル者ヲ乱タス罰則ヲ定事、  
 戸主争論は百日間ノ破門、友達ト争論は兩人共  
 五十日間ノ破門、規則狂人之者ハ二十五日ノ破  
 門、議長 正不礼之者十五日ノ破門、昇校不出席  
 之者七日破門

の12か条が定められ、基本的な教授方に加え、若者組の伝統的な制裁機能を思わせる「破門」というきびしい罰則が設けられている。すなわち、いままで「若連中」と呼んできた村の若者組を、そのまま「夜学生」と改称し、小学校での夜間の学習活動を中心とする若者集団に改めようというのである。

また、三方郡三方町白屋の大野六兵衛家文書にも、明治7年9月に作成された8か条からなる「夜学生規則」が残されている。そこにも、旧来からの若者組の名称とその活動を改めて、新たに「夜学寄場」を定め、15歳から25歳までの村の若者たちに勉学の道を開くという趣旨のことが述べられている。そして、前書き部分には、

「今般協議之上、当大区内一般若者仲間の称ヲ廃シ、更ニ男子十三年一ヶ月方二十年、若クハ妻を迎へて一家の産業ニ就クヲ期とし、概して夜学生となし、良師を求て夜間修学スルノ約束を定タル、習字、読書、算術等夫々志願の科目ヲ修するハ随意たるへし」と記され、これが当時の第四大区の方針であったことがわかる。明治7年9月といえば敦賀県のもとに、大区小区制という新たな地方行政制度が採用されていた時期であり、第四大区とは、ちょうど現在の三方郡にあたる地域のことを指した。新庄、白屋はともに第四大区の方針にしたがって、これを企てたのである。

このように、三方郡（当時の第四大区）では、明治7年から8年にかけて、「学制」にもとづく夜学校の開設にともない、村の若者組の旧習を改め、「夜学生」に改称しようとする動きがみられた。残念なことに、これ以外の地域の状況を記す史料は見あたらない。しかし、これも県あるいは政府から各大区を通じて旧習打破の方針が示されていたと思われ、各地でよく似た動きがみられたことが推測される。

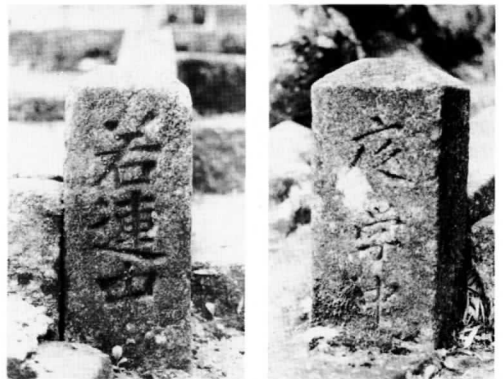
## III

若者組の「夜学生」への半強制的な改組・改称、はたしてこれが旧来の若者組の活動に実際どれだけの変化をもたらしたのか。この点に関しては、「規則」以外に夜学の運営状況などを記した史料が残されていないことから、十分に検討することはできない。ただ、月に数回程度の夜間の学習活動が、短期日のうちに若者の意識を変えたとは考えられず、若者組の旧習が、そのまま「夜学生」の名のもとに潜行したとする方が自然であろう。現に、新庄に残された文書からも、「若連中」の文字は見えなくなるが、旧来の活動はそのまま「夜学生」（あるいは「夜学中」）に引き継がれていったことがうかがえる。しかし、「夜学生」の呼称とその体験こそ、村の若者たちにとって、最も身近に感じた「文明開化」の時流であったことは無視できない。

そして、青年会・青年団への改組の道程は、また次の契機、すなわち自由民権運動による啓発を待つことになる。

注：(1)天野武『若者の民俗』1980年、ペリかん社、「一、若者集団」（11～47頁）参照。

(2)『福井県史』資料編15、民俗、昭和59年、第四章の三「2、若者組」（303～318頁）参照。  
 [付記] 本県における若者組の民俗調査についてご教示いただいた小林一男先生、資料の閲覧等でお世話になった県史編さん課の方がたに深謝いたします。



写真：三方郡美浜町新庄の松月寺の境内にある「若連中」と「夜学中」の碑（高さ約50cm）  
 （笠松 雅弘）

## 資料ニュース

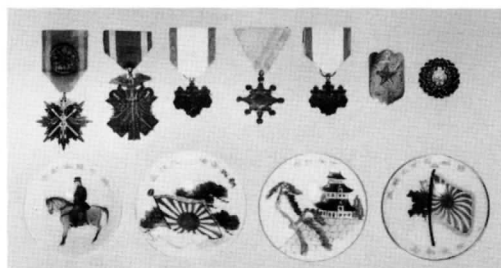
## 「加賀コレクション」寄託される！

このたび、武生市の加賀次男氏が戦後40年あまりをかけて収集した「戦争コレクション」約5,000点が、当博物館に寄託されることになりました。

その内容は、西南戦争から太平洋戦争にいたるまで、近代日本の戦争と軍隊に関係する各種の物品・文献資料で、①軍刀、軍服、軍帽、軍靴、記章・階級章、飯ごう、水とう、ラッパ、手帳などの軍装・軍用品類、②さかずきやとっくり、盆などの軍隊の記念品類、③戦争や軍隊を描いた錦絵類、④出征時の祝旗や寄書き日の丸旗、防空演習に用いた鉄カブトや防毒マスクなど、戦時下の国民生活をしのばせる物品類に大別することができます。その量からしても全国で屈指のコレクションといえるでしょう。なかでも、1,800杯も集められた除隊記念のさかずきや150枚にもなる錦絵などからは、きびしい戦時生活が強られる一方で、国民の戦争支持熱を鼓舞するかのよう華やかに彩られた「戦争美術」の世界が浮かびあがってくるようです。

加賀氏は、旧今立郡粟田部町の出身で、大正2年生まれ。昭和4年、東京の三秀舎印刷所に入社し、13年に召集を受けて金沢山砲兵第9連隊に入隊。16年に除隊した後、太平洋戦争下には産業戦士として東京三鷹の中島飛行機製作所に勤務。19年には帰省して本県警察官となり、終戦を迎え、戦後は、29年に武生の共和印刷に入社して61年まで勤務。子供のころから切手の収集を趣味とし、しだいにその範囲を貨幣、宝くじ、入場券などに広げ、戦後は、戦争や軍隊に関係する資料の収集にも力をそそいできました。現在では、切手をはじめとする各種のコレクターとして、全国的にも名が知られています。「決して戦争を賛美するのではないのですが、いま私が残さなければと思って集めてきたものを、なるべく多くの人たちに見てもらいたい」という氏の願いから、今回の寄託が実現しました。

なお、加賀氏の「戦争コレクション」展（仮称）を来年度に開催する予定です。できるだけ多くのみなさまに見ていただきたいと思います。（笠松）



勲章・記章と除隊記念のさかずき



各種の軍装・軍用品



さまざまな防空用品



戦時下の子供の玩具

## 郷土の人物シリーズ

いちのみや なが つね  
一宮 長 常

一宮長常は江戸時代に活躍した敦賀出身の金工師で、刀の附属品である鐔(つば)や小柄(こづか)緑頭(ふちがしら)などの作者として知られています。刀の附属品は本体である刀身に比べて低く見られがちですが、江戸時代に入って大規模な戦いが無くなり、武士も刀を装身の種類と考えるようになってから、凝った飾りをつけるようになり、専門の金工師が多数出現してきました。

長常は享保6年(1721)に敦賀に生まれ、13才のとき京都に出て保井高長に入門し、彫物の修業を続

けて30才で独立開業しました。絵も円山応挙を育てた石田幽亭に花鳥山水画を学んでいます。自分の作品の下絵として活用するための下絵帳も残っていますが、特に動物、人物などの動きのある線と正確な描写で才能の豊かさがうかがえます。

彫物の作品は、赤銅や臙銀(ろうぎん)の地に、人物、動物、草花などを高彫色絵で彫りあげたものが多く、当館にも「猫に雀囚緑頭」があります。東の横谷宗珉と並んで西の長常と呼ばれて高く評価されている人物です。

明和8年(1771)には故郷の地名を冠した越前大掾に任ぜられ、後に越前守となりました。天明6年(1786)に66才で没していますが、遺骨は敦賀の善妙寺にも分骨されました。(貴志)

## —新作ビデオライブラリーから—

## 化石が語る福井の5億年

福井県は、全国的に有数の化石の宝庫として知られています。古くは古生代シルル紀の三葉虫にはじまり、中生代、新生代の各時代の主要な化石が産出しています。そして、近年ようやく恐竜の化石や、我国最古の鳥類の足跡化石なども発見され、福井県の化石が一層注目を浴びるようになってきました。この番組は、化石を通じて福井県の大地のおいたちを紹介しようとするものです。

番組の中で大きな山場が2つあります。その一つは、今からおおよそ1億年ほど前、恐竜がすんでいたころの再現をしています。現在の北陸地方に肉食恐竜やワニなどが生活していた様子が分かります。山場の2つ目は、現在の日本海が出来はじめたころ(今から約1,500万年前)、日本海沿岸一帯は熱帯の環境でした。海岸には、マングローブの密林がひろがっていたことが産出する化石からわかっています。そこで、その様子を再現するために現在の沖縄の西表島のマングローブの撮影を行いました。その結果当時の様子が分かりやすくなったと思っています。

この番組を通じて、太古の時代を推理していただけたらと思います。

(東)

## 北前船

江戸時代なごころから明治時代なごころにかけて大阪を起点として日本海各地の湊に寄港しながら、北海道まで往復した廻船が北前船です。干石船とか買船・弁財船ともよばれ、帆走性よりも積載能力を重視した船の構造になっていました。

北前船は単なる運賃かせぎではなく、船主が荷主であり、各地の湊で商売をしながら航海する買積み船で、安く商品を買入れ、価格の高い所で売りさばくという方法をとっていました。そのため、利益は莫大なものがあり、1,000石積みの船で1年間に1,000両もの利益があったともいわれます。越前若狭では三国・敦賀・小浜が北前船の寄港地として栄えました。また数多くの船主が生まれたところでもあります。本番組では北前船の商売方法、船乗りの生活、船の構造、航海の方法等を各地の資料をもとにわかりやすく紹介しました。とくに日本海各地の北前船の寄港地である石川県福浦・新潟県出雲崎・山形県酒田・青森県深浦・北海道の小樽、江差、松前、函館で撮影した資料の数々は見ごたえがあります。なかでも、青森県深浦の円覚寺に残る小浜の北前船の船乗りが奉納した「髻額」からは、当時の船乗りの航海安全を願う気持ちが見えてきます。

(山形)

見て・聞いて・  
楽しんで・学ぶ

わたしたちの博物館

—秋と冬の行事あんない—

**講演会**

11/3(木) PM2:00~

**「肖像画にみる戦国時代」**

国学院大学教授 二木 謙一 先生

肖像画に描かれた戦国時代の武将や女たち。その生涯や歴史的な背景など、数奇な運命にあやつられた人物像をさぐる。

無 料 (なお、講演終了後に特別展の展示説明会を行ないます。)

**秋の特別展**

10  
/19(水)  
~11  
/27(日)

**武将のいでたち**

—福井ゆかりの甲冑と武具—



観覧料：一般 400円/大・高生 300円/小・中学生 200円

**冬の企画展**

2/7(火)~3/19(日)

**白山周辺のそり**

人びとは「そり」を用いることで、雪をじゃまものから便利なものに変えた。今回は、原始的なものから新しいものまで、白山周辺地域のさまざまな種類の「そり」を紹介する。

常設展と共通

**講演会**

2/26(日) PM2:00~

**「神と仮面」**

国立歴史民俗博物館教授 山折 哲雄 先生

仮面は神と人間との接点であった。講師は、本県で能面成立以前の古仮面の調査を行ない、その成果をもとに、わが国の宗教と精神史をさぐる。

無 料

(対象：高校生以上)

**歴史教室：明治の福井**

明治14年の福井県の設置とその後の社会の変化を追う。

- 10/15(土) PM2:00~ 「福井県の誕生」
- 10/29(土) PM2:00~ 「福井置県と嶺南地方」
- 11/19(土) PM2:00~ 「小学校の開設」
- 11/26(土) PM2:00~ 「交通の発達」
- 12/10(土) PM2:00~ 「神社と地域社会」

- 県総務部県史編さん課 吉田 健 先生
- 県総務部県史編さん課 中島 嘉文 先生
- 本館学芸員 山形 裕之 先生
- 県立藤島高校教諭 小谷 正典 先生
- 本館学芸員 笠松 雅弘 先生

無 料

(対象：高校生以上)

**美術史教室：仏教の尊像たち**

本県の代表的な仏教尊像とその信仰のあとを追う。

- 2/25(土) PM2:00~ 「観音信仰と尊像」
- 3/4(土) PM2:00~ 「地藏信仰と尊像」
- 3/11(土) PM2:00~ 「薬師信仰と尊像」
- 3/18(土) PM2:00~ 「阿彌陀信仰と尊像」

- 武生市文化財調査員 杉浦 茂 先生
- 県立美術館学芸員 芝田 寿朗 先生
- 本館学芸員 長坂 一郎 先生
- 大野市文化財保護委員 岩井 孝樹 先生

無 料

(対象：高校生以上)

**学習会**

みんなで試してみませんか。たのしみながら学びましょう！

- 10/23(日) PM1:30~ 拓本をとろう — 野外編 —
- 12/11(日) PM1:30~ しめなわを作ろう
- 1/14(土) PM1:30~ 竹細工であそぼう

申し込み・材料費が必要

**見学会**

さあ、出かけてみませんか。歴史と美術の探訪に！

- 11月中(未定) AM8:30~ 《遺跡見学会》 : (発掘の状況により、行き先を決定)
- 11/13(日) AM8:30~ 《歴史見学会》 : 江戸村と石川県立歴史博物館
- 3/19(日) AM8:30~ 《美術史見学会》 : 南越の観音めぐり

申し込み・保険料が必要  
(なお、現地での費用は、実費)

**ミュージアム シアター (映画会)**

PM2:00~

無 料

- 10/2(日) 「明治維新をめざした人々」・「福沢諭吉と文明開化」
- 11/20(日) アニメ「大恐竜時代」
- 12/4(日) 「地球大紀行」・「昆虫記の世界」
- 1/22(日) 「核戦争後の地球」
- 2/12(日) 「尾口村のデクマワシ」・「天下の奇祭、忌籠り祭り」
- 3/26(日) 「越後二十村郷、牛の角突き」ほか

○お問い合わせ、参加申し込みは、博物館学芸課まで。  
○日時、内容を一部変更することがあります。

ふくいミュージアム  
No.14  
1988. 9. 30発行

編集 福井県立博物館  
発行 福井市大宮2丁目19-15  
〒910  
☎ 0776-22-4675(代)  
印刷 出口印刷株式会社